

今週の為替相場見通し(2022年5月30日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		126.37 ~ 128.08	127.09	126.00 ~ 129.00
ユーロ	(ドル)		1.0559 ~ 1.0765	1.0736	1.0600 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		134.70 ~ 136.80	136.43	135.00 ~ 139.00
英ポンド	(ドル)		1.2475 ~ 1.2666	1.2628	1.2500 ~ 1.2750
(1英ポンド=)	(円)	*	158.00 ~ 161.02	160.45	158.50 ~ 161.50
豪ドル	(ドル)		0.7036 ~ 0.7167	0.7160	0.7090 ~ 0.7240
(1豪ドル=)	(円)	*	89.24 ~ 91.05	91.02	90.40 ~ 91.90

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 126.00 ~ 129.00 円

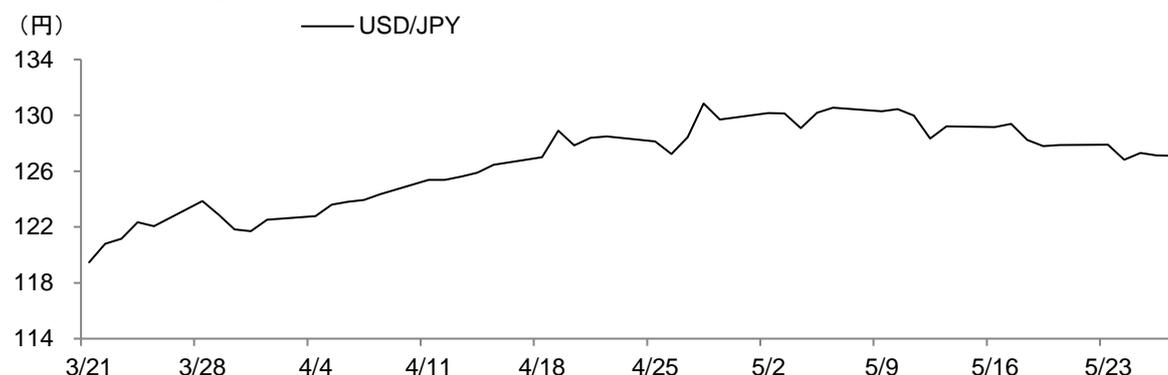
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のドル/円相場は週半ばに急落し持ち直す展開。週初23日、127.90円付近でオープンしたドル/円は先週末からのドル売りの流れが継続し127円台前半まで下落したが、その後は日米首脳会談でのバイデン米大統領の対中関税引き下げに関する発言からリスク回避の動きが一服。株式市場の堅調推移や米金利上昇に支えられ、127円台後半まで値を戻した。24日、ドル/円は米長期金利の上昇を横目に一時週高値の128.08円まで上昇も、ドル売り需要の強さに上値の重い展開が継続した。海外時間では株式市場の軟調推移や米長期金利低下に加え、米5月PMIの弱い結果に更にドル売りが加速し、一時週安値の126.37円まで急落した。25日、ドル/円は5・10日要因に伴う実需のドル買いや米長期金利上昇にサポートされじりじりと上昇。海外時間ではブレナードFRB副議長によるインフレ抑制へのタカ派的な発言に127円台半ばまで上値を伸ばした。26日、ドル/円は国会答弁での黒田日銀総裁による日銀の出口戦略を連想させる発言に円買いが強まり126円台半ばまで下落。その後は株価の持ち直しや米金利上昇に再び127円台前半まで反発した。27日、材料難の中、米金利低下の流れに126.68円まで下落。海外時間では、米4月個人所得が予想を下回る一方、米4月個人支出が予想を上回り、前回分も上方修正されたことからドル買い優勢となり、結局127.09円で越週した。

今週のドル/円は、堅調推移を予想。ドル/円は5月9日に131.35円の年初来高値を付けて以降、リスクオフ相場となり5円程度調整が入った。米小売大手の業績低迷や弱い米経済指標を受けて、リセッション懸念が高まったためだ。一方、先週発表の米4月個人消費関連指標は予想を上回ったものも確認され、リセッション懸念が「行き過ぎ」であった可能性が指摘されている。先週の米株市場の上昇基調転換も踏まえれば、米金利上昇の流れにドル/円も連れ高となることが期待される。また黒田日銀総裁による金融緩和の出口戦略発言により一時的に円買い局面があったものの、明確な根拠に欠け継続的なドル/円下押し圧力にはなり得ないとする。今週は米国でISM製造業/非製造業景況指数や雇用統計が発表される。前月比弱含む予想に対して「行き過ぎ感」が確認されれば、ドル/円は徐々に上昇基調を取り戻すと思われる。相次ぐ要人発言にも着目したい。また、タカ派的な姿勢を強めているECBの動きによってはユーロ/ドル上昇がドル/円の重しになるため、警戒が必要だ。今週は、31日(火)ユーロ圏5月CPI、1日(水)米5月ISM製造業景況指数、3日(金)米5月雇用統計、米5月ISM非製造業景況指数等の発表を控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/23~5/27)の値動き: 安値 126.37 円 高値 128.08 円 終値 127.09 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.0600 ~ 1.1000 135.00 ~ 139.00 円

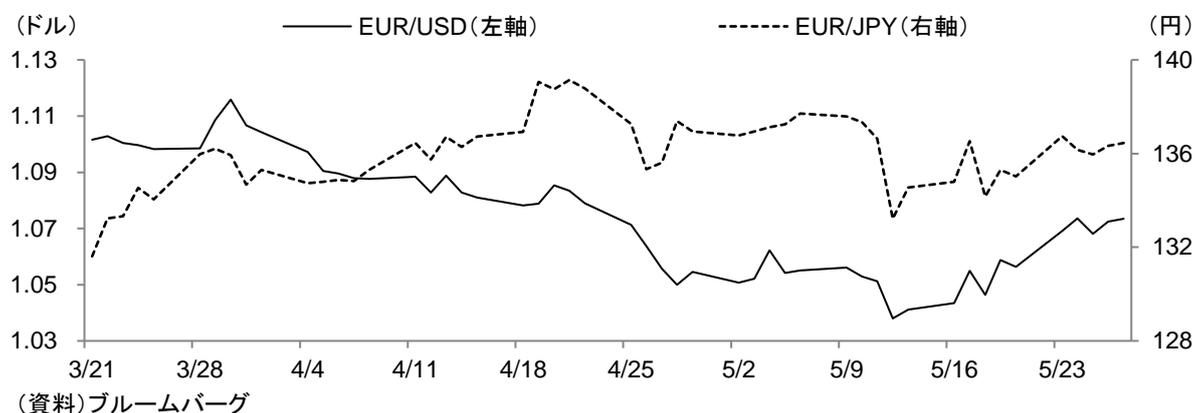
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇、堅調推移となった。週初23日、シドニー時間に週安値の1.0559を付けた後にオープンしたユーロ/ドルは1.05台後半で小動きとなったが、独5月IFO企業景況感指数の良好な結果やラガルドECB総裁によるマイナス金利脱却の可能性に触れたタカ派的な発言を背景にユーロ買いが強まり1.07手前まで上値を伸ばした。24日、ユーロ/ドルはECB関係者のタカ派的な発言や米経済指標の冴えない結果にドル売りが強まり、一時1.0748まで急伸、その後も堅調な値動きとなった。25日、ユーロ/ドルは前日までとは一転してECB関係者によるハト派的な発言から欧州経済の先行きが懸念された他、ポジション調整の動きに前日の高値圏から1.06台半ばまで下落。その後は小反発も戻りは鈍く、1.06台後半での揉み合いとなった。26日、ユーロ/ドルは欧州時間に下げ幅を拡げるも、欧州株の堅調推移が支援材料となり、1.07台前半まで上昇した。週末27日のユーロ/ドルは一時1.06台まで弱含む場面も見られたが、ECB高官から早期利上げ開始に関する発言なども見られ1.07台前半を維持してクローズした。

今週のユーロ/ドル相場は引き続き堅調な推移を予想している。ユーロ/円相場についてもユーロの上昇に連れ高となると考えているが、円高も進行しているためユーロ/円の上昇は緩やかなものになるだろう。先週月曜日、ECBのブログにラガルドECB総裁の投稿が掲載され、金利正常化の道筋が示された。第三四半期の早い時期での資産買い入れ終了、これによる7月の利上げ開始、第三四半期中のマイナス金利脱却等、今まで以上に踏み込んだタイムスケジュールが示された。これによりECBの早期利上げがほぼ確実視され、ユーロ/ドルは上昇した。一部ECB高官からは否定発言なども見られているが、利上げの可能性を示唆する他の高官なども見られ、ECBの7月利上げ開始期待がユーロの上昇を後押しすると考えている。また、今週は31日(火)に欧5月CPI速報値の発表が予定されており、インフレの加速が見られれば市場は早期利上げが正当化されると見てユーロ買いが一段と進むのではないかと考えている。一方で、米国ではインフレのピークアウト説や利上げによる景気減速懸念が出てきており、ドル売りもユーロ高を押し進める要因となると考えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/23~5/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.0559 高値 1.0765 終値 1.0736
(対円) 安値 134.70 高値 136.80 終値 136.43



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2750 158.50 ~ 161.50 円

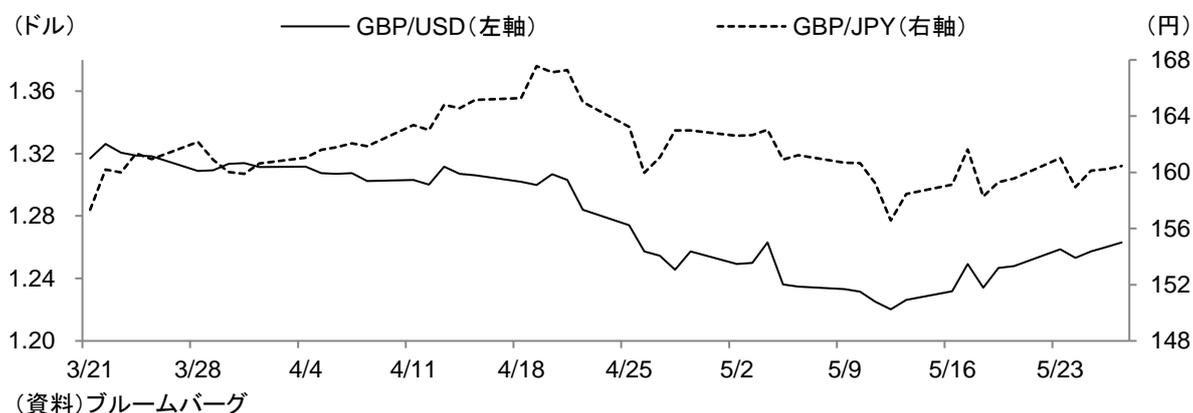
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルで明確に上昇、対円でも小幅上昇、対ユーロでは小幅ながら逆に水準を切り下げた。主要通貨に対する値動きが分かれたのは、ポンドそのものに明確な方向感がなかった結果と考えられた。ポンドが唯一方向感を見せたのは24日のポンド全面急落で、この局面の下落幅の大きさが、週を振り返っての上昇、小幅上昇、小幅下落を分けたように感じられた。24日のポンド全面安は、同日発表された英5月各種PMI暫定値の下振れがきっかけ。とりわけ、サービス業PMIは、前月が58.9、市場予想57.0のところ発表は51.8と、大きく落ち込んだ。これは、英経済が2度目のロックダウンを経験した20年末～21年初来15か月振りの低水準で、人件費の高騰や人材確保の困難が、とりわけサービス業の景況感を傷めたものと受け止められた。ここも英メディアが盛んに報じている「物価高騰による生活苦(cost of living crisis)」の文脈にも乗る話で、物価上昇(とりわけ燃料価格上昇)が、英消費、ひいては英経済成長の阻害要因として大きく浮上してきた事実を確認した格好。スナク財務相は、26日、燃料会社を対象とした一時課税(windfall tax)などを財源とした、各種補助金配布を発表したものの、ポンドの方向感に明確な影響を与えることはなかった。ポンドの地合いが比較的堅調だったのは、英固有の要因よりも、欧州中銀やスイス国立銀の利上げ観測の高まりに連れた結果ではなかったか。一方で、金融引き締めで先行した米連銀の利上げ織り込みが一巡したことで、ドルが本格的な調整安局面に入ったことがドル全般の軟調を演出したものと考えられた。

今週の英ポンド相場は、ドル調整安の継続と、対ドルでの上昇余地は見込めるものの、その他通貨に対しては、英連休(2～5日)でロンドン市場が休場になることもあり、方向感に乏しい軟調気味の推移を中心に予想する。ドル指数(ICE)は、1年前後続いた、ほぼ一方的な棒上げから、天井を打って調整安局面に入ったように見受けられる。直近高値(2020年3月の102.99)や、2017年初年から引ける上値抵抗線(手元のチャートで102.45)を維持することができれば、調整安といっても、或いは、様子見気分の強い横ばいが続く可能性(かつての上値抵抗線が下値支持線としてドルの下値を支えるような展開)を見込んだが、先週、あっさり102を割り込んでしまった。こうなると、テクニカルには本格的な(ドル安方向への)水準調整を見込まざるを得ない。言い訳としては、上述の通り、米連銀の利上げ織り込み、欧州中銀、スイス国立銀など他の先進國中銀が追随してきたことが挙げられよう。この構図の中で、英中銀の立ち位置は微妙。ポンド軟調を中心に見込むのは、英景気の順調な回復に自信が持てないから。英中銀は、昨年12月に利上げに踏み切り、先進國中銀の中では利上げで先行した中銀のひとつだったものの、市場との対話は必ずしも円滑なように思われない。昨年11月にはタカ派的な情報発信をした上で利上げを見送った経緯もあったし、その後も、追加利上げに関する踏み込み具合は、時と場合によって大きく揺らいでおり、一貫性を欠くように感じられる。上述、各種補助金も、配布されないよりは、配布された方が、勿論、需要を増大させ、消費を活性化させる力になるが、そもそもは物価高騰で失われた需要を穴埋めするための方策。消費/物価の今後に対する影響は交錯しており、その見極めは容易ではない。こうした交錯は英経済だけのものではない一方、英固有の特殊要因も、英中銀の金融政策判断を難しくしている。28日、女王在位70周年式典の連休(上述)を前に、英航空各社は大規模なフライトのキャンセルを発表した。その主な理由は人手不足で、コロナ禍で解雇した従業員の再確保が間に合わないという。こうした構図は、航空業界に限らず、広くサービス業全般が抱える問題で、上述、サービス業PMI悪化の要素とも言える。英の労働者不足は、EU離脱だけが原因ではないものの、コロナ禍からの経済活動再開に際し、英固有の阻害要因に少なからずなっているものと考えられる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/23～5/27)の値動き: (対ドル) 安値 1.2475 高値 1.2666 終値 1.2628
(対円) 安値 158.00 高値 161.02 終値 160.45



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7090 ~ 0.7240 90.40 ~ 91.90 円

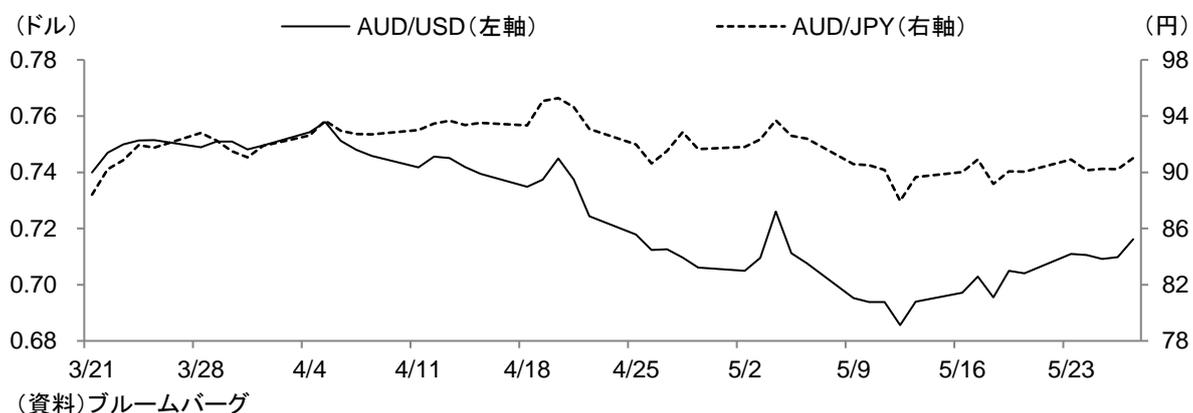
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.70台半ばから0.71台半ばまで上昇。21日に実施された豪総選挙では労働党が勝利し7年ぶりの政権交代が決定。週明け23日、総選挙の結果を受けた相場の反応は比較的冷静だったが、ハングパーリメント(どちらの党も過半数を取れない状態)の回避は濃厚との安心感から買いが先行した。バイデン大統領が対中関税引き下げの可能性に言及したこと等が買い材料となり欧米時間に株価が上昇に転じると、豪ドルもさらに上値を迫る展開となり一時0.71台前半まで上昇した。24日、序盤は軟調な株価を背景に売りが先行。その後、ラガルドECB総裁やホルツマン・オーストリア中銀総裁によるタカ派的な発言を受けてユーロが買い進まれる中、米ドルに売りが膨らみ、豪ドルは上昇に反転。米5月製造業・サービス業PMI、米5月リッチモンド連銀製造業指数など、諸々の米指標が弱い結果だったことを受けて米ドル売りが強まり、豪ドルは0.71近辺まで買い戻された。25日、RBNZ理事会ではオフィシャルキャッシュレートを+50bp引き上げ2.00%とすることを決定するとともに、年末の金利予想も大幅に引き上げタカ派的な内容に。NZドルが大きく上昇する中、豪ドルも小幅連れ高の展開となるもすぐに反落。FOMC議事要旨は今後2回の会合での+50bp利上げを強く示唆する内容で、特段サプライズなく、米ドルが買い戻される展開に豪ドルは下落するも、その後リスクセンチメント改善を受けて株価が上昇する中、豪ドルは0.70台後半まで買い戻された。26日、豪1~3月期設備投資は▲0.3%と、市場予想の+1.5%に反してマイナスの伸びを記録。この結果を受けて豪ドルは売りが先行し、一時0.70台半ばまで下落した。その後NY時間に株価が大幅上昇すると豪ドルも買いに転じ、0.71台まで回復。27日、朝方発表された豪4月小売売上高は前月比+0.9%と、4か月連続の増加となり、前月に引き続き過去最高を更新した。この発表を受け豪ドルは買いで反応し、0.71割れから0.71台半ばまで上昇。米4月PCEコアデフレーター(前年比)は前月よりも低下しており、インフレのピークアウトが示唆される結果に。米株価が上昇幅を拡大させる中、豪ドルは一段と買い進まれて0.71台半ば近辺で引けて越週。

今週は31日(火)に豪4月住宅建設許可件数、1日(水)に豪1~3月期GDP、2日(木)に豪4月貿易収支が予定されている。豪1~3月期GDPに関しては、前期比、前年比ともに前期よりも大幅にスローダウンすることが予想されている。RBA理事会を来週に控え、金利市場では次回+25bpの利上げを完全に織り込んでいるが、豪1~3月期GDPの結果次第では市場織り込みに修正が入る可能性もある為、GDPの結果には注意を払いたい。足許、米インフレのピークアウトが意識され、米株価が持ち直しているが、このままリスクセンチメントが上向けば、豪ドルは底堅い値動きとなるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/23~5/27)の値動き: (対ドル) 安値 0.7036 高値 0.7167 終値 0.7160
(対円) 安値 89.24 高値 91.05 終値 91.02



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。